

## 10月5日（火）

おはようございます。

私がよく朝礼でもお話する大好きな経典の中に、シャンティデーヴァという人が書いた「入菩薩行論」というのがあります。この経典の冒頭に「善を修めることで、信心が深くなるだろう」という言葉があります。たったそれだけの言葉なのですが、ドラマ法王のユーチューブを聞いていましたら、この言葉はとっても大切な言葉だとおっしゃるわけです。

どういうことかということ、法王様は、善を修めるということは、何が良いかということを知るということではないと言われる。

「修める」ということは、心に馴染ませるということであり、「分かる」ということではない。例えば、皆さんは勉強の大切さは分かっているはず。勉強をしなくてはいけないということも分かっているはず。しかし、分かっていたら勉強ができるかということそうじゃないでしょ。

仏教では、「聞思修」ということをとても大切にしています。これは三慧(さんね)と言うのですが、「聞」は、聞いて分かるということ。「思」は、それを考えるということ。「修」は、考えた上で、自分が納得したら心に馴染ませていくということです。例えば、人は何が良いか何が悪いかということは分かっている。また、徳を積まないといけないということ、人に親切にしなくてはならないということも分かっている。しかし、それを分かっていることと、良いことを行うことや、徳を積むことができるということとは別なのです。

清風であれば、「核心に触れるまで努力をせよ」と教えている。あるいは「福の神のコースを歩きなさい」ともね。そういうことを心に修めるということは、それを心に馴染ませることなのです。そうすれば、信心が深いものになると法王様はおっしゃっています。また、信心とは、単に信仰心といったことだけではないとも。信心には三つの意味があり、一つ目は、「あー、あれはいいなあ」と思うことが信心の最初のステップ。二つ目のステップは、「それが、自分にも起こったらいいなあ」ということ。そして、三番目の信心は、「やってみて間違いなかった！ この道しかない」と確信することであると。

学園長がときどき、校祖平岡岩峯先生は、生徒朝礼では、いつも同じ話を繰り返されたとお話されますが、岩峯先生が何度も何度も同じ話されたその意図というものは、何事かを分かったとしても人はそう簡単にはできるものではないところにあると思います。校祖

は、大事なことは、耳に胼胝(タコ)ができるまで、胼胝の上にさらに胼胝ができるまで、よく言って聞かせなくてはならないと言われましたが、心にしっかり馴染ませるようにやっていけば、生徒諸君がいつか確信をもってやれるようになるだろうという意図で、繰り返し同じ話をされたのだと思います。私は、昨日ダライラマ法王のお話を聞きながら、そのようなことを考えました。

諸君は朝礼で、「あ、また同じ話やなあ」と思うかもしれませんが、自分はそれができているかと問うてみてほしい。何度もいいますが、分かっているということと、できるということとは別なのです。

例えば、かっとなって怒ってはいけないということも、勉強をしなくてはならないということも諸君は分かっているはずです。しかし分かっている、あるいは分かっているのに、できないということがある。以前の朝礼で、卒業生の宮村先生のことを紹介しましたよね。先生が、高校二年の後半に、「勉強というものは、人にやらされるものではない。自分で自分を律してやるのでないといけないと確信出来たとき、自分できちんと勉強することができるようになった」というお話。こういうふうに勉強ということが自分の心に馴染んで確信を得たとき、勉強ができる状態になるのです。

私の場合は、校祖とは違って同じ話を繰り返すというより、いろいろなエピソードを交えて同じ内容のことを伝えようとしますが、やっていることは同じだと思っています。

法王様がおっしゃたように、「やってみて間違いなかった！ この道しかない」と確信するまで、教えを自分に馴染ませていくようにして行ってください。

学校長